

身近な自然とのかかわりを通じた子どもの気づきから原体験の重要性を探る

○大西 明実(東京家政大学大学院生¹⁾) 大澤 力(東京家政大学大学院)

1. はじめに

子どもの頃の体験がその後の人生に影響し、家族の愛情・絆を基盤に多様な体験をした人ほど自己肯定感が高くへこたれない大人になることが、国立青少年教育振興機構¹⁾より明らかにされている。都市部だけでなくスマートフォンやパソコン、ゲームなど室内で遊べる魅力的な遊具があることなど子どもを取り巻く環境が激変している現代において、特に若い世代の子ども時代に、自然体験や友だちとの遊びが減少している現状にある。幼児期は知識や知恵を生み出す種子を育む土壌を耕す時と捉えると、図鑑や映像などでの間接体験の前にそのもととなる直接体験を行うこと、原体験(proto-experience)による自然との出会いが重要である。

原体験とは、「生物やそのほかの自然物、あるいはそれらによって醸成される自然現象を触覚・嗅覚・味覚の基本感覚を伴う視覚・聴覚の五官(感)で知覚したもので、その後の事物・事象の認識に影響を及ぼす体験」であり、大脳の旧皮質で長期記憶に蓄えられる。火、石、土、水、木、草、動物といった7つの自然物と情感(ゼロ)体験を原体験の項目として、これらの自然物に触れ、遊んだり何かを作ったりすることでそれらに対する認識が深まる²⁾とされている。

日常生活の中での原体験が希薄な現状において、保育現場では保育者が意図的にこの基本となる要素に出会わせるように導いていけることが望ましい。

2. 研究の目的

都市部や園庭のない園でも容易にかかわることが出来る身近な自然を保育の環境に意識して取り入れ、子どもが主体的に直接体験する中での気づきに着目し、子どもの気づきの変化から原体験の重要性を検証することを目的とする。

3. 研究の方法

都市部の協力園にて、遊べる草花、雑草プランター、栽培などを意図的に取り入れ、四季折々の身近な自然にかかわれる工夫の参与観察を行い、日常保育、登降園時の子どもが自らかかわる姿を観察記録し、その変化の過程を平成29年5月より週に1回~2回継続的に捉える。

4. 結果と考察

一事例1：種取り—9月~11月

3歳児のR児は、夏休み明けから毎日種取りを楽しんでいる。はじめはフウセンカズラの実を採ることに夢中であったが、つぶれた時の感触の面白さに気づき、友だちや保育者、母親に試すよう勧めている。そのうちに視野が広がり、オシロイ

バナや朝顔の種にも気づき、まずは取ることに集中する。時間の経過に連れて、種を並べて数を数える。他のモノに見立てる。剥いてみるなど試す行動が増える。まだ緑色の種と茶色くなった種を比べ違いに気づき、「黒い方ができているよ。固い」など言葉にして伝えている。更にはより高いところ、取りづらいところから取ろうと試行錯誤する。友だちに取ってあげる。友だちとやりとりをし、同じ数ずつポケットにしまうなど、自分だけであった気づきから、同じ目的に向かっている友だちと共有する楽しさを見出している。

一事例2：中学校校庭の秋探検(4歳児・24名)—

近隣にはふんだんにどんぐりを拾える場所がないが、園から徒歩5分の所にある中学校の校庭にはシラカシを始め様々な自然物があり秋探検を実行する。皆夢中になって拾い、匂いを嗅いで「みてー」と自分の気づきを保育者や友だちに伝える。園に持ち帰り自分で拾ったもので思い思いのモノを作ったり、12月後半まで継続的にどんぐりや落ち葉を取り入れての遊びが展開した。作ることがあまり好きではないA児は、この時は夢中になってペットボトルの中にどんぐりを入れ、落ち葉をつけたマラカスを試行錯誤しながら作る。出来上がると友だちに見せに行き、降園時には母親に駆け寄り自慢げにマラカスを見せ、今日あったことをすすんで話していた。

事例1では、毎日種取りをする中で様々な気づきや驚き、試す中での変化や発展があり、11月後半には、植物の変化や種によって咲く花が違うことに気づいたり、友だちと同じ目的に向かう心地よさを見出している。事例2では、夢中になって拾った経験から、うまくいなくてもあきらめずに作ってみたいという感情が芽生えている。このことから、直接的な体験が子どもの興味関心を導き出し、様々な気づきの変化や積み重ねが資質・能力を育む基盤となることが明らかとなった。だからこそ、豊富な原体験を身につけることは重要であると考えられる。

今後は、協力園での継続的な観察記録を続け、保育者自身が原体験による新たな可能性や原体験を伴った遊びの重要性を再認識し、保育に意図的に取り入れていく在り方について考察を深めていきたい。

注

1 人間生活学総合研究科修士課程

引用文献

- (1)明石要一ら、国立青少年教育振興機構(2010)
「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」
(2017)「子供の頃の体験がはぐくむ力とその成果

児童学児童教育学専攻 大西明実
日本保育学会第 71 回大会 宮城学院女子大学 (仙台市)
H30.5.12～H30.5.13

に関する調査研究」
(2)山田卓三(1993)生物学からみた子育て. 裳華房